様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月　６ 日現在

機関番号：２３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2020
課題番号：１６Ｋ０２９７１

研究課題名（和文）小学校英語教育における初期リテラシー導入に向けた「音韻認識指導プログラム」開発

研究課題名（英文）The development of phonological awareness instruction programme for Japanese L1 children: With an aim of introducing early literacy into Japanese elementary school English education

研究代表者
池田　周（Ikeda, Chika）

愛知県立大学・外国語学部・教授

研究者番号：５０３０５４９７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：英語の初期読み書き習得のレディネスとして「音韻認識」を高める重要性は、主に英語母語習得研究で広く認識されている。本研究は、小学校英語教育における文字導入前に英語の「音韻認識」を明示的指導により高める意義を明らかにした。小学生の音韻認識に、モーラ（子音＋母音）単位で音を区切る日本語の影響が現れることを確認し、英語読み書き習得に必要な音素単位の認識が母語習得過程では発達しづらいことから、集中的に育成する必要性を裏づけた。さらに日英語の音韻構造や正書法の違いを考慮して、国語科のローマ字指導に関連づけて音韻認識を高めるための教材を作成し、指導実践により小学生の音韻認識が精緻化する効果を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義
音韻認識は文字的要素を含まず、音の分析や操作を行う能力である。英語の「文字と音の対応」を知識として学び、単語を発音できるようになるフォニックスに必要な基礎能力であるものの、日本の英語教育研究ではまだ認知度が低い。母語である日本語の音韻特徴が、英語の音韻認識習得に及ぼす影響を、継続的に様々な手法で明らかにした点に、本研究の学術的意義がある。また音韻認識を、国語科のローマ字指導と連携させ、英語の文字指導を始める前に確実に発達させる重要性を唱えたこと、および小学校の英語教科化に合わせ、日本語を母語とする小学生の「英語の初期読み書き」習得困難を回避するための研究であることに社会的意義もある。

研究成果の概要（英文）：Phonological awareness (PA) is sensitivity to the sound structure of language, especially the internal structure of words. This study claimed the significance of developing PA prior to the introduction of early literacy instruction in Japanese elementary school English education. A series of PA assessments by means of both recognition and production tasks revealed that the basic phonological unit of Japanese, which is mora, affects the segmentation of English words by Japanese-speaking children. Based on the findings of phonological processing of those children, the intensive programme for enhancing PA necessary for learning to read in English was proposed, especially focusing on the Japanese L1 children. Some part of this programme can be incorporated in the teaching of the “Romanisation of Japanese” in the Japanese curriculum. The proposed programme was implemented in several elementary schools and yielded the effect of elaborating children’s PA after the instruction.

研究分野：英語教育学、応用言語学

キーワード：音韻認識　初期リテラシー技能習得　英語読み書き技能習得　小学校英語教育

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1)「音韻認識（phonological awareness)」とは言語の音声構造、特に単語の音声的内部構造に対する感度のことである。「音韻認識がある」とは、音声言語が様々な音韻レベル、すなわち「脚韻」や「音節」などの大きな単位だけではなく、より小さな「音素」などから成ることを理解し､それらのレベルで音を意図的に操作できる能力を備えた状態である｡音韻認識については、リテラシー習得、特に初期読み技能の獲得と関連づけて、主として英語母語習得の分野で研究が行われてきた。音韻認識の発達と初期読み習得はそれぞれの発達に相互に貢献し合うが、特に音韻認識が読みの発達を「始動させる」という。そのため英語圏では、子どもの読み技能習得の失敗を防ぐために音韻認識指導が広く導入されている。

(2) 一方、日本語の基本的音韻単位は最も単純な音節構造（子音(C)＋母音(V)）を成すモーラであり、各々１つの仮名文字に対応する。そのため日本語の読みに必要なのは、主にモーラレベルの音韻認識である。対照的に、英語は文字と音の対応が不規則なため、単語を読むために、言語普遍的に重要で比較的大きな「音節」レベルの音韻認識に加え、小さな個々の「音素」ごとに音を分析できる必要がある。また先行研究より、音韻認識は、音韻構造の単純な母語から複雑な第二言語へと転移する可能性は低いと指摘されている。

(3) 本研究の土台となる平成 27 年度までの科研費プロジェクト〔基盤（C)〕では、平成 20 年改訂の小学校学習指導要領で導入された小学校高学年の「外国語活動」において、「児童の関心が高い文字や簡単な単語の読みをどう扱えばよいのか」という現場の教員からの問いかけに答えるため、日本語を母語とする子どもに英語初期リテラシーをどのように導入すべきかを考察してきた。そして文字や初期読みの具体的導入方法を論じる中で、言語習得において文字に触れる前、すなわち十分な音声インプットを受けた段階で発達させるべき「音韻認識」の存在とそれがリテラシー発達において果たす役割を認識した。そこで英語を母語とする子どもを対象にした音韻認識研究で開発されたタスクを用いて、日本語を母語とする小学３～６年生の音韻認識を測定したところ、どの学年にも、日本語の音韻構造の影響と考えられる特徴が顕著に現れていた。すなわち、英語の単語を構成する音を、日本語の基本的音韻単位であるモーラの区切りで分析しようとする傾向があり、さらに英語の読み技能発達に必要な音韻認識のうち、特に音素単位で音を操作する能力が十分に発達していないことが明らかになった。

(4) これまでの研究を通して、ほとんど調査されていなかった日本語を母語とする小学生の音韻認識を英語タスクにより測定したことには意義がある。しかし英語母語話者向けに開発されたタスクを用いたため、日本語特有の音韻構造の影響を焦点化できなかった可能性がある。また用いたタスクの種類も、特定の音の把握や単語中の位置の特定という「認識」技能を求めるものであり、実際に音の削除や入替えをして操作する「産出」技能を測るものではなかった。本研究では、日英語の音声学的特徴の違いを考慮しながら、単語を構成する音素の聞こえ度や音変化などを反映した音韻認識測定タスクを作成する。これにより、日本語を母語とする小学生にとって認識や操作が困難な音韻単位をより具体的に把握し記述することが可能になる。さらに、英語の文字や読み技能を、認知的発達段階の観点からまだ音声的な言語習得がふさわしい小学生に導入するためには、自然な習得につながるように前もってその発達に必要な音韻認識を高めておく必要性、すなわち英語読み技能習得促進のために焦点化した音韻認識指導を行う意義を論じることができることから本研究を開始した。

２．研究の目的

上述の研究動機および背景に基づき、以下３点を主な目的として設定した。

(1) 日本語を母語とする小学生の音韻認識について､「認識」タスクだけでなく、新たに「産出」タスクを加えて包括的に測定する方法を確立する。用いる英語の語やその音韻構造についても、体系的に整理するとともに、語の親密度が結果に影響しないように配慮する。

(2) アルファベットを用いた日本語の音韻表記である「ローマ字」の指導と音韻認識指導を関係づけることで、英語初期リテラシー習得を促進する可能性を検討する。そして、国語科と外国語科の連携を見据えながら、具体的な指導法を検討する。

(3) 小学校英語教育において初期リテラシー（読み書き）導入に先立ち必要な「音韻認識」を発達させるため、特に日本語を母語とする英語学習者にとって分析が困難な音韻単位やタスクを考慮しながら「指導プログラム」を開発する。プログラムは学習内容に応じたステップ式とし、具体的な指導手順や理論的解説、ワークシートを含む教材としてまとめる。実際に小学校で指導実践を行って効果を検証するとともに、導入に適した学年を考察する。

３．研究の方法

(1) 文献研究：音韻認識と読み技能習得に関する諸理論、研究動向については、最新文献を収集して考察した。さらに英語母語話者向け音韻認識指導法や教材の収集と分析も行い、日本の小学生に適用できるタスクをデータ化した。これらに基づき、音韻認識指導プログラムに含める具体的な指導タスクを考案した。その際、小学校３学年の国語科の学習内容であるローマ字の指導に、音韻認識指導を部分的にでも組み込む可能性を検討するため、日本語と英語の音韻構造に関する文献や、正書法の違いによるリテラシー習得の特徴に関する文献の考察も行った。

(2) 日本語を母語とする小学生を対象とした音韻認識調査

①調査目的：産出タスクを用いて日本語を母語とする小学生の音韻認識を測定し、特徴を考察。

②調査材料：「C_1VC_2 語の C_1 または C_2」(C:子音、V:母音)、あるいは「子音連結(CC)を含む語の CC のいずれか」を口頭で操作する音韻認識テスト２種類〔テスト１：Phoneme Manipulation Test（操作タスク：子音の「削除(deletion)」と「置換(substitution)」)、テスト２：Initial Phoneme Deletion Test〕(図１参照)。

③調査対象者：日本語を母語とする小学 1～6 年生 30 名〔1 年生：4 名（男 1 名、女 3 名)、2 年生：6 名（男 3 名、女 3 名)、3 年生：5 名（男 3 名、女 2 名)、4 年生：6 名（男 5 名、女 1 名)、5 年生：4 名（男 3 名、女 1 名)、6 年生：4 名（男 1 名、女 3 名)〕

④調査方法：調査対象者に対し、調査者が個別にテストを実施し、回答を録音・録画。

⑤分析方法：調査者と児童英語教育を専門とする英語母語話者の 2 人で回答の音声を記述。

⑥結果：本調査から日本語を母語とする小学生の英語音韻認識について、音素の「削除」や「置き換え」という「操作」技能においても、「音声言語をモーラ単位で区切る」という日本語の音声処理特徴の影響がうかがえることが分かった。具体的には、(a)子音の音を単体で保持することが困難なため、その子音の後ろに挿入されやすい母音を伴って操作する傾向性がある、(b)C_1VC_2 語の操作において C_1V+C_2 という区切りで C_2 を操作する方が、C_1V のモーラを分解して音を操作するよりも容易である、(c)単語の「はじめの音」を削除するタスクの結果から分かるように、子音が 1 つの音として認識されることはない、さらに (d)[(a)～(c)に基づき]音素「操作」(産出)の側面から測定した小学 1～6 年生の音韻認識の平均は、これまで調査者が「認識」(受容) の側面から測定した小学生の音韻認識よりも低く、英語を母語または第 2 言語とする子どもたちの 2 年生レベルにも及ばないことが明らかになった。

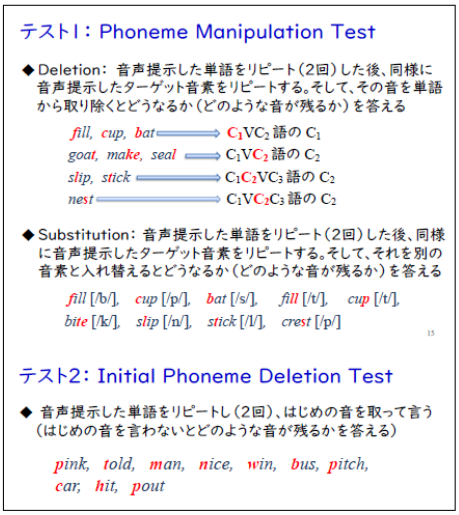

図１：2 つの音韻認識テスト概要

またテスト 2 において、調査者の後に続いて繰り返しができるようになった単語の「はじめの音を言わない」で児童が発した誤答のうち、特徴的なものを人数とともにまとめたのが図 2 である。結果から明らかになったのは、(A)本調査の児童のように誤答の子音の存在について明示的な指導を受けていない段階では、「単語のはじめの音を削除する」タスクが非常に困難なものであったこと、および(B)[図 2 の「誤答から推察される音の区切り」のカタカナ表記にうかがえるように]英語の単語の「はじめの音」を「はじめの CV のまとまり(モーラ)」として捉えたことが原因と考えられる誤答が多かったことである。すなわち、*pink* では /pi/ の部分を日本語の「ピ」の音、*man* では /mæ/ を「マ」、*bus* の /bʌ/ を「バ」、*pitch* の /pi/ を「ピ」と認識して、それらを単語の「はじめの音」として削除し、残りの部分を答える傾向がうかがえた。

		正答数	正答	誤答例 (数)	誤答から推察される音の区切り（カタカナ表記）
1	*pink*	2	/íŋk/	/ŋk/ (15)	ピ・ンク
2	*told*	5	/óʊld/	/lu:du/ (5), / ludu/ (4), / ʊ:ld/ (2)	トウ・ルドゥ
3	*man*	4	/æn/	/n/ (21)	マ・ン
4	*nice*	1	/áɪs/	/ɪs/ (16)	ナ・イス
5	*win*	13	/ín/	/n/ (10)	ウ・ィン
6	*bus*	1	/ʌs/	/s/ (10), /su/ (15)	バ・ス
7	*pitch*	3	/ítʃ/	/tʃ/ (12), /tʃi/ (11)	ピッ・チ
8	*car*	15	/ɑ́:r/	/r/ (4), / ɑ́:/ (4)	カー・ル／カ・アール
9	*hit*	4	/ít/	/t/ (11)	ヒッ・トゥ
10	*pout*	1	/áʊt/	/ʊtu/ (8), /ʊt/ (8), /t/ (4)	パ・ウトゥ

図２：テスト２の結果、および誤答例

(3) 小学校教員による「考案タスク」の指導実践調査

①調査目的および手法：研究過程の中で、小学生の音韻認識データに基づき、音韻単位の大きさや「分解」、「混成」、「削除」、「置換」などの音韻認識技能の難易度の違いについては考察が進んだが、タスクそのものの扱いやすさについては実際に小学校教員の見解を確認することが必要と認識した。これは、実際の指導プログラム作成にも影響することであり、それに先立って予備調査を実施して明らかにすることとした。主要な音韻認識技能に関する代表的なタスクを用い、公立小学校３年生と５年生の各１クラスで、約３か月間、それぞれの担任により短時間学習の形

で実施してもらった。指導前後に実施したテストから児童の音韻認識の変化を明らかにし、さらに担任の授業記録と複数回の非構造化インタビューを通して、タスクの適切性を考察するためのデータを収集した。
②結果：以下４点が認識された：(A)「削除の認識タスク」から始める指導は、音素に対する児童の興味・関心を引きつけるには良い出発点であった。この段階で、日本語と英語の音の違いについて調音法を具体的に示すことで、より意識化できると考えられる。実際に、音に関心を示し始めた児童が、教員の口元などに注意を向けるようになった点を教員も指摘している。中学年はやはり集中力、難易度の観点から、児童のやる気をなくさせないように短時間の繰り返しでの導入が必要である。(B)語の「はじめの音」の認識の困難さ、および子音の違いによる困難度については、これまでの研究を支持する結果である。これらを指導でどう焦点化して扱うかについては、タスク間のつながり（目的の連続性）が分かりやすいコンテンツを組むこと（児童にもタスクで目指すところが明らかになるように）が重要である。(C)指導による伸びが見受けられる項目もあったが、顕著な成果を得るには、もう少し頻度を上げて継続的に行う必要がある。(D)指導を担当する教員が身に付けておくべき知識や、指導技能も整理して提示できるようにする。

(4) ローマ字指導と関連づけた音韻認識指導の実践と音韻認識測定調査
①調査目的：３学年「国語」においてローマ字を、日本語のモーラ（拍）の「子音」と「母音」を分割して聞かせることにより「子音」の「音」の存在に気づかせるアプローチで導入し、児童の学びの様子を観察する。また、導入後に英語の音韻認識テストを実施し、その結果を異なる学習方法でローマ字を学んだ児童の結果と比較・考察。
②調査材料：本研究で開発した指導教材、および以下３つの音韻認識テスト
A. Initial Phoneme Identification Test：音声提示された C_1VC_2 語の初めの音(C_1)が、ターゲット音素（/s/,/m/など）と同じかどうかを答える。　e.g., /t/: *pen*, *tape*, *top*, *duck*
B. Phoneme Identification & Location Test：音声提示された C_1VC_2 語の中に、ターゲット音素（/s/,/m/など）があればその位置（「はじめ(C_1)」「おわり(C_2)」)、なければ「なし」と答える。e.g., /s/: *neck*, *sun*, *class*, *grass*, *sick*, *pen*
C. Rime Recognition Test：口頭提示された３つの C_1VC_2 語のうち、他とは音が異なると思われる語を答える。e.g., *tip*, *lip*, *mop* [V] / *rock*, *sock*, *hop* [C2] / *beak*, *leek*, *tip* [VC_2]
③調査対象者：小学校３年生３クラスの児童（分析対象数 計 67 名）
④調査方法：調査対象の小学校では、国語科のローマ字指導は「ローマ字一覧表」、「ワークブック」などを用いて、読み方と書き方まで行われることとなっていた。そのうちローマ字導入の初めの２回の授業において、本研究で提案するアプローチにより子音の音への気づきを高め、モーラの分割や、子音と母音の結合のタスクを行った後、担任による通常の指導に引き継いだ。ローマ字指導が終了した後、「音遊び」として音韻認識テストを実施。

(5) ローマ字指導と関連づけた音韻認識指導実践と音韻認識・初期スペリング力測定調査
①調査目的：ローマ字指導に先立ち「子音の音」の存在に気づかせる指導が、ローマ字と英語のスペリング力にどのように影響を及ぼすかを明らかにすること。
②調査材料：(4)と同じ指導教材と音韻認識テスト、本調査用に作成したスペリングテスト
③調査対象：Ａ小学校３・４年複式学級児童 12 名、Ｂ小学校３年児童（分析対象数 計 39 名）
④調査方法：３学年「国語科」でローマ字学習を一通り経験した児童に、日本語のモーラ（拍）の「子音」と「母音」を分割して聞かせることにより「子音の音」の存在に気づかせる指導を行い、学びの様子から指導可能性を検討。また導入授業に続き一定期間の「文字の音」の定着活動を担任主導で行い、その前後に行った「外来語をローマ字と英語で書き取る」活動から、「スペリング（書くこと）」への指導効果を考察。

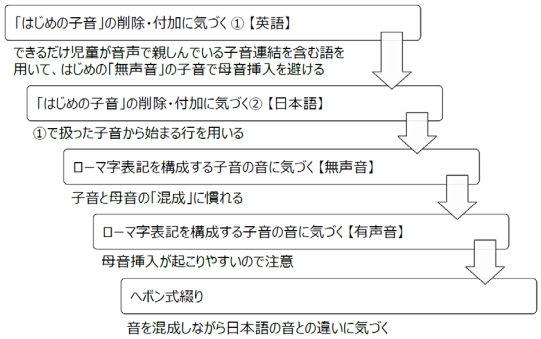

図３：指導の流れ

⑤結果：アプローチ導入の「書くこと」への波及について、「ローマ字学習直後」と「子音の音アプローチの導入後」の比較から、アプローチ導入前後でローマ字（*pinku*）が正しく書けている児童は、ほぼ英語（*pink*）の書き取りができていたことが分かった。しかし指導後にローマ字で「pimku」、英語で「pimk」のように/N/の音が/m/となってしまったものがある。また、ローマ字学習を通して「子音の後に必ず a, I, u, e, o」のどれかを付けるように定着してしまっている例もある一方で、英語（*pink*）の書き取りの場合に、母音が全て落ちてしまう例も複数。語尾の /k/ は正しく書き取ることのできる確率が高い。

４．研究の成果
以上の一連の調査研究を通して得られた成果は、以下の通りである。
(1)日本語を母語とする小学生の音韻認識の特徴
英語を母語とする子どもへの音韻認識指導法の考察を進める中で、日本の小学生に対する英

語音韻認識指導に向けて、日英語の音韻構造や正書法の違いや、指導開始時の英語既習得語彙の少なさが、その指導と習得に困難をきたすことが推察された。それゆえ、様々な学年で小学生の音韻認識を測定し、そこから重点的に指導すべき技能や音韻単位を整理するとともに、日本語の音韻認識が英語の語を用いたタスクへの影響も明らかになった。例えば音韻認識は、音を区切る単位の大きさにより、いくつかの種類に分けられる。英語の読み書き技能獲得のためには、「音と文字の対応が複雑な」言語であるために、より小さな単位の音韻認識（＝音素認識）だけでなく、オンセット・ライムという「個々の音素より大きいが音節より小さい音節内単位」の認識も必要になる。実際に英語を母語とする子どもは C_1VC_2 語を C_1+VC_2 に区切ることが先行研究から明らかなのに対して、モーラ（CV）を基本的音韻単位とする日本語を母語とする子どもは C_1V+V_2 の区切りで単語を分析する傾向を様々な手法で確認した。

また本研究では、音韻認識の「認識」技能だけでなく「産出」技能も含め、日本語母語話者にとって操作が困難と考察された音素をターゲットとして調整しながらテストを作成し、測定を行うことができた。「産出」技能を扱うため、児童に個別で実施して録音するテスト手法となったことから調査に時間がかかり、調査対象が小規模となったという課題もある。しかし結果から、音素レベルで単語から音の削除や置き換えを行う際に、日本語の基本的音韻単位であるモーラ（CV）で音声言語を区切ろうとする特徴、および初期リテラシー発達のレディネスとなるレベルまで小さな音韻単位の認識が自然に発達することは期待しづらいことを明らかにした。得られたデータに基づき、英語の読み書き導入までにローマ字指導と組み合わせ、口頭での「音遊び」として音韻認識を高めておく必要性を主張できたことは意義深い。

(2)小学校外国語教育における音韻認識指導プログラム構築

日英語の音韻特徴や正書法の違いを考慮しながら、日本語を母語とする小学生にとって認識や操作が困難な音韻単位に焦点を当て、単語を構成する音素の聞こえ度や音変化などを考慮した音韻認識測定タスクをまとめた。これにより、英語読み技能習得を促進するために集中的な音韻認識指導を行うことが可能となる。ステップ式の指導プログラム内容とし（図 4)、それぞれに理論的な背景をまとめた解説も添付することとした。指導案やワークシート教材は、その後の研究および実践調査で用いてながら改良を重ね、学会発表やセミナー等を通じて学校現場にも提供している。

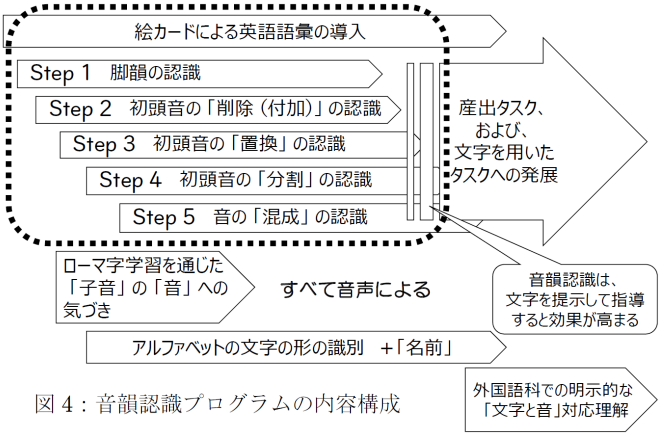

図 4：音韻認識プログラムの内容構成

(3)国語科ローマ字指導と連携した音韻認識指導の意義

音韻認識は基本的に文字とは関係なく、語を構成する音を分割、混成、操作する技能に関わる。そのため、児童が単なる記号ではなく「言語の書記素」として、英語の文字でもあるアルファベットに触れる前に高めることに意義がある。それこそがアルファベットを用いた日本語の音韻表記である「ローマ字」指導のタイミングである。

本研究成果から、小学校第３学年のローマ字指導に先立ち、日本語の「かめ(kame)」と「あめ(ame)」、「くま(kuma)」と「うま(uma)」の音を聞き比べて音素/k/の存在に気づき、それが英語の *koala* の「はじめの音」、*pink* の「おわりの音」であることを認識する活動を行い、そこから音韻認識指導を始めることを提案する。

このアプローチにより、ローマ字指導においても、例えば「ま(ma)」を「エムとエイのアルファベットを合わせて『ma(ま)』」という説明が減ることが期待される。つまり「/m/と/a/の音を表すアルファベットを合わせて『ma』」という指導が可能になる。そうして高学年「外国語」では、「オンセット・ライム」の区切りから語の「はじめの音」に焦点を当て、それを表す小文字との対応に気づかせる指導へとスムーズな接続が可能となる。

(4)今後の研究への課題

本研究を通して構築した「音韻認識指導プログラム」の教材を試用した小学校教員から「英語の読み書きを導入するまでに、音韻認識をどれだけ高めておけば、その後の習得のつまずきを防ぐことができるか」、「音韻認識の面から、読み書きの学習を始める準備が整っていることを確かめるにはどうすればよいか」という問いを受けるようになった。今後、「音韻認識の指導における到達目標（目指す音韻認識レベル)」を明らかにすることを課題として研究を継続する。英語の音韻認識指導をさらに普及させるためにも、その到達目標レベルを具体的に示し、その達成状況を適切に把握する方法を提案する必要を強く認識している。同時に、小学校で高めた音韻認識を、中学校の「語の読み書き」指導で効果的に活用する具体的な方法を示すことにより、小・中学校の英語「読み書き」指導をつなぐモデルにもなることから、音韻認識が文字と関係づけられて生じる形態素認識にも焦点を拡げて、初期リテラシー指導を考察していく計画である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 池田 周	４．巻 Vol. 2
２．論文標題 小学校「外国語」徹底解説	５．発行年 2020年
３．雑誌名 英語情報	６．最初と最後の頁 2-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 池田 周	４．巻 1月号
２．論文標題 フロントライン教育研究「文字の音に気付く ― 国語科のローマ字指導と外国語科の接続を意図した音韻認識指導の在り方」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 初等教育資料	６．最初と最後の頁 74-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 池田 周	４．巻 Vol. 18
２．論文標題 日本語を母語とする小学生の音韻認識 ― 音素操作タスクに見られるモーラ認識の影響 ―	５．発行年 2018年
３．雑誌名 JES Journal	６．最初と最後の頁 pp. 52-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 池田　周	４．巻 第7号
２．論文標題 小学校段階での英語音韻認識指導 ― その意義と指導可能性	５．発行年 2016年
３．雑誌名 英語教育研究	６．最初と最後の頁 9-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 池田 周
2．発表標題 子音の「音」への気づきを生かす：「音韻認識から初期スペリングへの指導」予備研究
3．学会等名 小学校英語教育学会 北海道研究大会
4．発表年 2019年

1．発表者名 池田 周
2．発表標題 「文字の「音」に気づく ― ローマ字指導からの接続を意識した「音韻認識」 指導プログラム ―」
3．学会等名 小学校英語教育学会
4．発表年 2019年

1．発表者名 池田 周
2．発表標題 音韻認識の指導プログラム構築に向けて ― 内容の組立てと指導可能性 ―
3．学会等名 小学校英語教育学会（JES）兵庫大会
4．発表年 2017年

1．発表者名 池田　周
2．発表標題 日本語を母語とする小学生の音韻認識　― 産出タスクに見られるモーラ認識の 影響 ―
3．学会等名 小学校英語教育学会第16回全国大会
4．発表年 2016年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関